



今よりもっと、これからもずっと

西武学園文理小学校 5年 川口 颯

いつものようにスクールバスから外の景色をながめていた。五才ぐらいの男の子とお母さんが手をつなぎながら楽しそうに話をしている。そういえば、ぼくが最後にお母さんと手をつないだのはいつだったかな。

思い出はたくさんある。手をつないで幼稚園から帰るとき。ぼくがぎゅつぎゅつとお母さんの手をにぎる。お母さんも同じように返す。リズムを変えても、また同じように。あのころのぼくは、それが楽しくてお母さんの顔を見上げながら、いろいろなリズムを試したものだ。痛い記憶もある。気になるものを見つけたぼくは、つないだ手をふり払い飛び出した。すぐにお母さんに手をつかまれて引き戻された。もう少しで大事故になるところだったかもしれない。あの時のお母さんの何とも言えない表情をまだ覚えている。

「つなぐ」とは、どちらか片方だけではかなわない行為なのだと思う。互いのバランスが大事な条件なのだろう。そんなことを考えているうちにバスは学校に着いた。

その日ぼくは、お母さんの手にそつと触れてみた。いつのまにか、ぼくの手はお母さんの手とそれほど変わらない大きさになっていた。突然のことにお母さんはぼくの顔を見て笑いなが

ら、あの時と同じようにぎゅつぎゅつとぼくの手をにぎった。もちろん、ぼくも同じリズムを返した。久しぶりにつないだ手。二人とも、自然と昔に戻れた。手はつながなくなっただけ、心はつながっているのかな。

心のつながり。それは目で見ることができない分、不確かだ何だか不安な感じもする。けれど、時間をかけてつながつてきたからこそ、実はものすごい力でつながつているんじゃないかなとも思う。お母さんとつないだ手をはなしても、ぼくは一人で歩いていける。でも、心のつながりは、これからもずっと、そして今よりもっと強く確かなものにしていきたい。そんなことを考えた、ある日の出来事だった。

(審査評) こどもから大人へ、その入り口にさしかかった少年の心情が、母との「手をつなぐ」行為を描くことによってよく表現されている。「手はつながなくなっただけ、心はつながつているのかな」「お母さんとつないだ手をはなしても、ぼくは一人で歩いていける」母への思いと一人立ちへの決意が素直に表現できていて、いとおしくなるような作品だ。テーマ「つなぐ」からおそらく最も連想されるであろう「手をつなぐ」を自分の感性によって非凡な作品に仕上げる事ができたのは作者の力量だ。

小幡真吾